

## 黒篷船

子榮君へ

お手紙受け取り、君がわたしの故郷に行こうとしていて、君に何か案内が欲しいとのこと承知いたしました。実を言うと、わたしの故郷、本当に懐かしく思う場所は、別にそこではありません。しかしそこで成長し、十年あまり過ごしたので、結局少しは情況がわかっていますから、この手紙を書いて君にお知らせします。

わたしがお知らせしようというのは、その風土人情ではありませんし、それは書きつくせません。しかし君がそこへ行かれてご覧になればわかることは、くたかく言うまでもありません。わたしが言おうとするのは面白い物についてであります。それは船です。君は家郷ではふだん人力車、電車、あるいは自動車に乗りますね。だがわたしの故郷ではそうしたものはどれもありません。城内あるいは山の上で駕籠を使う他には、ふつう歩くのに代わって皆船を使います。船には二種あって、ふつうはみな「黒篷船」です。白篷のは大抵が航船用で、夜航船に乗って西陵に行くのは特別の風趣があります。しかし君が乗るには要するに不便ですから、わたしも言わないでよいでしょう。黒篷船大きいのは「四明瓦」(Sy-menngo)で、小さいのは脚划船(划はuoaのように読む。〔足漕ぎ舟〕)で、亦小船とも称します。しかし最も適当なのはやはりその中間の「三道」、やはりつまり三明瓦です。篷は半円形で、竹片で編んで、中に竹の皮を挟み、上に黒いペンキを塗ってあります。両脇の「固定篷」の間に一枚日よけのを置いて、やはり半円で、木で格子を作り、一枚一枚小さい鱗型、径約一寸、すこぶる透明なのを嵌め込んであります、だいたいガラスに似て硬く耐用性があり、これを明瓦と言うのです。三明瓦とは、その中の船室に二枚、後方の船室に一枚の明瓦を持っているのを言います。船尾で櫓を使い、大抵は二丁、舳先には竹棹があって、それで船を止めます。船の先頭には眉目が書いてあり、虎のような様子ですが、微笑んでいるようでもあり、すこぶる滑稽で怖くはありません。ただ白篷船にはこれがありません。三枚の篷の高さはだいたい人が直立できるほどで、船室の広さは、四角いテーブルを一つ置き、四人が坐って麻雀ができます。——これは君はもうできることでしょう。小船はほんとうに一葉の偏舟で、船底のむしろに坐ると篷の天井は君の頭から二三寸離れているだけで、君の両手は左右の舷におけ、手を外に出すこともできます。こうした船ではまるで水面に坐っているようで、田んぼの岸に近づくときは泥土が目と鼻の先です。しかも風浪に遇うと、坐り方が少し不注意だと、たちまち船底を天に向けてひっくり返り、とても危険ですが、またすこぶる面白く、水郷の特色であります。でも君は乗らなくて構いません。最もよいのはやはり三道船に乗ることでしょう。

もし船で出かけるとすると、電車に乗るようにせっかちに、すぐ着くと思っはなりません。もし町を出て、三四十里の道のり(わたしたちの所の里は短く、一里は漸く一マイルの三分の一ほどです)を行くとすれば、行き帰りにどうしても一日は見ておかねばなりません。船では、遊山の態度をとるべきで、周りの風物景色、随所に見える山、岸边の櫓の木、川辺の蓼や田字草、魚舎、様々な橋を見て、眠くなったら船室で眠るか、随筆を取り出して読むとか、あるいは一杯

の緑茶を淹れて飲むとかするのです。偏門外の鑑湖一帯、賀家池、壺觴付近、わたしはいずれも好きです。あるいは婁公埠まで行って驢馬に乗って蘭亭に遊び、（だがわたしのお勧めはやはり歩行で、驢馬に乗るのは君にはふさわしくないかもしれません）暮色蒼然となる頃に城壁にオオイタビが絡まった東門に入るのは、すこぶる面白いことです。もし陸路が穏やかでないならば、杭州に行くには午後の出航がよろしい。黄昏時の景色はまさに最も見事です。ただ残念なのはそのあたりの場所の名前をみんな忘れてしまったことです。夜間船室に眠っていて、水音櫓の音、行き来の船の掛け合いの声、それに郷間の犬や鶏の鳴き声を聞くのも、とても面白い。一艘船を雇って田舎に宮芝居を見に行けば、中国の旧劇のほんとうの趣味が理解できます。それに船での行動は思いのまま、見たければ見るし、眠りたければ眠るし、酒を飲みたければ飲む。わたしは理想的な行楽法だと思います。ただ残念なことは維新以来について言いますとこうした芝居と神迎の儀式が全部禁止になって、中産階級の低能人が別に「布業会館」などに「上海式」の芝居舞台を作り、みんなに券を買わせて上海の女芝居を見せることです。そんなところには決して行ってはなりません。——わたしの故郷に行かれても、誰もご存知の人はいないでしょう。わたしも又教師稼業ですからあなたのお供をして、夜行船に乗ったり、無駄話をしたりすることができないのは、実に濟まなくしかも心残りなことです。川島君夫妻は今偁山の麓にいて、本来ならあなたに紹介してよいのですが、あなたがそこに行く頃には彼らはおそらくもう故郷を離れていることでしょう。寒中、お体にお気をつけください。不尽。民国十五年一月十八日夜、北京にて。

※初出：1926年11月27日『語絲』第107期